

論文の和文要旨	
論文題目	中国語結果補語文における目的語前置現象の意味と構文
氏名	崔 婷
<p>本論文は、現代中国語の動詞が結果補語を伴った「動詞+結果補語 (Verb+Resultative complement)」構造 (以下では V1V2 と表記する) がさらに目的語を伴う場合、それが統語上 V1V2 構造の前に生起する現象に注目し、コーパスの実例に対する実証的な研究を通じて、この現象の統語的制約と意味論的な動機づけを解明しようとするものである。</p> <p>中国語の V1V2 構造は、動作とその結果という時間軸上で連続する事態を表しており、「動作」は動詞によって表現され、動作によってもたらされた客体の変化による「結果」は補語によって表現される。このような「動作—結果」は限界性のある(telic)複雑事象を表し、開始から終了までのプロセスが全て含まれた形である。「動作—結果」によって表される事象は、動作主体 (x) が対象 (y) に働きかけ、対象 (y) が変化し、最終的にある状態 (z) で (またはある位置に) 存在するという使役変件事象である。x を主語にし、y を目的語に据えたものは他動詞表現であり、y を主語に据えたものが自動詞表現である。ただ、中国語の結果補語文における自動詞表現は結果状態が生じる原因になっている行為の部分は統語上消去されず残っており、変化を被る y が文頭に置かれる形式になっている。</p> <p>本論文は、動作行為の結果に注目し、変化を被る y が V1V2 構造の前方に生起する現象を、影山 (1996) によって提唱された「脱使役化」のもとで考察する。とりわけ、結果補語文における自動詞表現の成立しやすさに関わる要因、及び動作主の積極的な関与と動作主の背景化との関連を、対象の状態変化と動作主の関わり方という観点から分析するための、基礎的なデータを示し、分析の枠組みと分析の結果を提示する。</p> <p>本論文は、全 7 章からなる。以下、各章の概要を示す。</p> <p>第 1 章では、本論文で取り上げる、目的語が V1V2 の前に生起し、さらに動作主項をとらない現象について、先行研究に基づいてその概略を示す。また、分析の対象である V1V2 構造について、その意味用法や構文に関わる先行研究の指摘を概観した後、本論文の解決すべき問題を示す。</p>	

第 2 章では、先行研究に基づく理論的枠組みを紹介し、本論文の分析の方向性を示す。

まず、事態認知のスキーマとして参与者 (participants) 間の関係をエネルギーの伝達と捉える行為連鎖モデル (Langacker1991) と事態の因果連鎖モデル (Croft1991) を紹介する。また、影山 (1996) が提案した「脱使役化」では、語彙規則によって動作主が抑制されるが、このことと中国語の結果補語文の「脱使役化」において動作主が背景化されることで生じる「脱動作主化」という現象は共通しているという見解を示す。

次に、V1V2 全体のアスペクト的特徴を取り上げる。V1V2 において V1 はアスペクト的特徴に関与せず、結果補語 V2 の語彙アスペクトによって V1V2 全体のアスペクトが決定されることを指摘し、本論文で問題とする瞬間性と持続性は V2 のスケール (scale) に依拠していることを述べる。

最後に、他動詞表現から自動詞表現への変換が成り立たず、受身表現が用いられる場合について言及する。限界性 (telicity) を表す V2 によって事象は完結性を表すことになり、結果状態が前景化されて結果に至るまでの変化や動作の過程は必然的に背景へと押しやられる。しかし、動作と結果が連続で同時に存在する V1V2 では、結果よりむしろ動作主のあり方や「動作主」が発した動作 V1 の様態・手段に重点を置き、その結果自動詞表現が許されずに、受身マーカーがつく場合がある。この点についても動作主の必要性という観点から考察する。

第 3 章では、状態変化という観点から、動作主の積極的な関与と自動詞表現の成立しやすさの関連の有無を調べる。また、状態変化のタイプを確認しながら、自動詞表現になりやすいタイプとその要因を分析する。

まず、V1V2 構造が持つ限界性から語彙概念構造 (LCS) における BE AT-z の部分を中心に、本論文が収集した結果補語による状態変化がどのような性質を持つ変化なのか確認を行った。そして具体的なデータとして、146 個の V1V2 サンプルにおける自動詞表現の実際の分布状況を調べた結果、状態変化のタイプによって自動詞表現が成立しやすいものとそうではないものがあることが判明した。具体的には、物が無から有へ変化することや、あるいはある物を素材としてある完成品が作り上げられるという出現型 (EXISTENT) の場合、自動詞表現の方が好まれる傾向があるのに対し、物が有から無へ変化することや、あるいは正常な状態から機能不全状態へ変化するという消失型 (DISAPPEARED) の場合、受身表現が用いられやすくなることが判明した。自動詞表現が好まれるタイプの特徴として、行為によって何かが作られることを意味する「作成・生産」という点が挙げられる。例えば、動作主の積極的な関与を必要とする

ことから、本来自動詞表現が成立しにくいと思われる作成事象において、特別な道具や出来上がり具合を細かく指定する場合は、中国語においては自動詞表現が好まれる傾向があることが観察された。この事実は、中国語は作成事象による自動詞表現が成立しにくい日本語や英語とは区別されることを示しており、このことから中国語では動作主の積極的な関与によって動作主が背景化されにくくなるとは必ずしも結論づけられないことが分かる。中国語において作成事象による自動詞表現が可能になるのは、V1による結果述語 V2 が対象物 (theme) の最終状態を示しており、事象完結時に産出物または完成品が出来上がることを重視するからであると考えられる。

作成によって完成品が出来上がる事象は、どうしても動作主を必要とするため、動作主の積極的な関与によって動作主の背景化が阻まれるとは言えなくなる。むしろ、動作主が積極的に関与する V1V2 で自動詞表現は選ばれる可能性が高くなるのではないかと思われる。この点をさらに明確にするため、次の章では別の観点から検証することにする。

第 4 章では、変件事象における動作主の関わり方という観点から考察を進め、動作主の変件事象への関与と動作主の背景化の程度をアスペクトの特徴から考察し、定量的分析を導入し、検証する。

まず、動作主や外力の存在する状況により受動的に変化を被る対象とそれに変化を与える事象との関係を規定する。動作主が事象にどの程度関与しているかという側面から見ると、変件事象は大きく以下の三つのタイプに分かれると考えることができる。一つ目は、動作主が決定的な役割を果たす事象である。この場合、状態変化の実現は変化を起こす主体の内在的な性質ではなく、動作主や外力によるもので、動作主は開始から結果に至るまで完全に関与しなければならない。二つ目は、内在的な性質が関わる事象である。状態変化の実現には内在的な性質も関わるが、基本的に動作主や外力によるものである。三つ目は、主に内在的な性質による変件事象である。状態変化の実現は主に内在的な性質によるものであり、動作主は最初の段階だけ関わるが、その背後には必ず動作主が介入することが前提とされている。以上の三つは、語彙概念構造 (LCS) に基づく動作主の背景化のしやすさの階層を示している。しかしながら、中国語に特有の作成事象による自動詞表現では、動作主が事象の最後まで関わっており、上記の語彙概念構造 (LCS) に基づく動作主背景化の階層は中国語においては必ずしも妥当性を有しているとは言い難く、さらにデータからの検証が必要になってくる。

次に、上記の動作主の関わり方による三つの事象タイプについてそのアスペクトの特徴に着目し、178 個の V1V2 サンプルの情報を使って、その背後にある母集団についての情報を予測し、確認する。その目的は動作主の関わり方と動作主の背景化されや

すさとの関連性を計量的に示すことにある。五つのテスト項目を設け、変量解析を行った結果、全サンプルの中で「動作主が最初から最後まで関わるタイプ」の割合が最も高く、二つの完結性を表す期間表現「～時間で」と「～時間をかけて」でのテスト項目でそれぞれ 66.9%、63.4%を占めることが明らかになった。この中には作成タイプの V1V2 が多く含まれているため、変件事象において動作主の関わりが強いタイプのほうが動作主は背景化されやすいということが言える。また、このような事象タイプの数が圧倒的に多く、動作主が背景化されやすいということは、中国語では一般に動作の結果生じる完成品に焦点を当てて動作のあり方を述べる傾向があるということの意味している。これは、中国語が「結果重視」(Tai1984, 2003) 言語であることも裏付けることになる。

その一方、同一の V1V2 でも、それがとる対象物によっては、常に他動詞用法しか認められない例も見られる。本章ではその違いは、動作主の身体部位が関与していることと変化主体が無界 (unbounded) という特徴を有することにあると主張する。

第 5 章では、自動詞表現になりやすい付随的要因を、文中の成分との共起関係によって提示する。

動作主の関与を高める要因であると見られる動作主の意図や動作 V1 の様態を表す副詞と共起する場合、自動詞表現は成立しにくく、動作の様態を指定することによって動作主は背景化されにくいことがわかる。その一方、道具・方法手段・材料は動作主が積極的に事象に参加することを表すにも関わらず、それが統語構造に現れても自動詞表現は問題なく成立する。これは、様態副詞と道具との共起関係に明らかな偏りがあり、特に共起関係においては道具が好まれるという傾向を示している。また、実際のデータには道具と様態副詞が同時に生起する例もある。それは、様態副詞が生起することによって本来成り立ちにくいはずの自動詞表現が道具と共起することによって成立するようになるという現象である。この現象から、道具は動作主が何かを作成する際に何らかの技術的関心の的となる成分と見なされるため、道具との共起によって動作主の背景化が阻止されることはないということが導かれる。

変化の側面を修飾する程度や数量を表す成分と共起する場合は、対象物の状態変化に焦点が当てられるため、自動詞表現が成立しやすい。一方で、“一口气 (一気に入)” などの副詞と共起する場合は、「動作の結果状態」と「動作の様態」のどちらかに視点が当たっているのかが判断しにくくなるため、自動詞表現の成立に支障が生じる。

さらに、本章では原因節との共起によって自動詞表現が成立しやすいことが観察された。結果補語文における自動詞表現は、原因・理由を表す原因節と生起し、それが統語構造で具現されるという言語事実から、原因節との共起では外項となる出来事が

抑圧されることはないことがわかる。このような原因を表す出来事は結果補語 V2 によって導入されたものであり、このことから、V1V2 において V1 は外項選択に関与せず、V2 が外項の選択に関与しているということがわかる。

第 6 章では、結果補語文における自動詞表現とその周辺の成員を取り上げ、周辺の自動詞表現の統語的特徴と使用条件を示す。本章ではまずその中で代表的なものとして、V1V2 構造のうち“打 V2”を例にとって分析を行った。その結果、V1 “打”は本来の語彙的な意味を失い、動作主の具体的な動作を表していないため、抽象化した動作が背景化されやすくなると主張した。

次に、周辺の成員として“唱紅（歌って人気が出る）”を取り上げた。V1V2 構造“唱紅”の自動詞用法は条件付きで、「主語+動詞+結果補語+目的語」の統語形式で表される。これには場所項との共起が必要とされ、意味的に項構造（Theme, Location）が要求される。このような場所名詞句は“唱紅”の表す語彙の意味によって求められる項ではないのだが、場所を項にとることによって、事象全体が時間の幅を持つ「持続性」と「非一回性」というアスペクト的特徴を有するようになっていくことがわかる。こういった場所項を伴う自動詞用法は意味的に「遍満状態」を条件とし、“唱紅”が表す事態において「人気が出る」から「遍満状態」の意味へ拡張されたと分析できる。このように、場所項を伴う自動詞表現の適格性はメトニミー（metonymy）による意味の拡張に支えられていると考えられる。

V1V2 構造“打 V2”と“唱紅”における共通点としては、V1 が比較的虚な意味を持っており、V1V2 の語彙化が進んでいることが挙げられる。これからわかることは、他の V1V2 構造と比べると、V1 が語彙的な意味を失うことによって、動作主が背景化されやすいということである。

第 7 章では、本論文の論考をまとめる。

本論文では、中国語結果補語文における目的語前置現象の意味と構文について、概念構造の観点から検討してきた。特に、状態変化した物を生み出す時間からアプローチし、動作主の背景化は①事象完結性に伴って現れる被制作性という特徴を有していること、及び②動作主が決定的な役割を果たす事象という特定のタイプに偏ること、以上 2 点が明らかになった。これは、中国語は表現の視点が変化を被る対象のところに置いてあり、BE AT 型言語（結果型言語）の視点を基礎としていることに原因があると考えられる。

論文の最後には、付録として以下の表、リストを掲載する。

付録 I アスペクト的特徴テスト表

付録 II 結果補語リスト及び結果補語構造における自、他動詞表現（日本語・中国語・朝鮮語）